

# 多文化共生の社会を目指した国際理解教育

- 帰国・外国人児童生徒と共に育つ国際理解教育の在り方 -

国際理解教育研究会議

関 恵美<sup>1</sup>

加藤 香代<sup>2</sup>

熊谷 孝二<sup>3</sup>

多和田 律子<sup>4</sup>

## 要 約

現在、川崎市内の小・中学校に在籍している帰国・外国人児童生徒数の割合は、全児童生徒数の約3%に相当し、1学級に1人は帰国・外国人児童生徒が在籍していることになる。今後も、帰国・外国人児童生徒が増加することが予想され、子どもたちは学校教育の中で多様な文化をもつ人々と共に学ぶ、すなわち多文化共生の社会で学んでいくことが、ごく自然な状況になりつつある。

そこで、本研究会議では帰国・外国人児童生徒と共に育つ国際理解教育について「4つの資質や能力（自文化理解・多文化理解・コミュニケーション能力・自尊感情の育成）を育てる授業を工夫し、継続的に実践すれば、帰国・外国人児童生徒、日本人児童生徒が互いに双方の豊かさをはぐくみ、違いが豊かさとして響き合い、3者が互いに尊重しあいながら成長していくだろう。」との研究仮説を設定して、研究を進めた。そして、指標やかかわり合う多様な場を設定し、指導者の連携、教材の開発等の手立てを工夫して授業を実践してきた。

その結果、「帰国・外国人児童生徒と日本人児童生徒が互いに尊重しあいながら成長していく姿」、具体的には「柔軟な心で違いを受け入れ、理解する姿」「様々な人やものとのかかわりを通して、自分を振り返りそのよさに気付く姿」「違いに出合い問題が生じた時、それを解決に向かって乗り越えていく姿」などを、年間を通した実践の中で見ることができた。そして学級の友達とのかかわりの中で、帰国・外国人児童生徒、日本人児童生徒の変容の様子をとらえることができた。

キーワード：多文化共生、帰国・外国人児童生徒、自文化理解、多文化理解、コミュニケーション能力、自尊感情の育成

## 目 次

主題設定の理由	(2) 指標と課題を設定する	62
1 川崎市の実態から	(3) 検証授業を実施する	62
2 川崎市外国人教育基本方針から	(4) 検証授業を分析・考察する	62
3 中央教育審議会答申から	5 研究の計画	63
研究の内容	6 授業の実践	
1 「共に育つ」のとらえ	(1) A中学校の事例	64
(1) 外国人児童生徒と一緒に学習を行っ ていく上での配慮すべき点	(2) B中学校の事例	66
(2) 帰国児童生徒のもつ特性	(3) C小学校の事例	68
(3) 「共に育つ」学習を通して日本人児童 生徒に身に付けさせたい能力	研究のまとめ	
2 研究の仮説	1 研究を通して見えてきたこと	70
3 研究の構想	2 今後の課題	72
4 研究の方法	参考文献	72
(1) 川崎市の帰国・外国人児童生徒と日 本人児童生徒の実態を把握する	指導助言者	72

<sup>1</sup>川崎市立新城小学校教諭（長期研修員）

<sup>2</sup>川崎市立今井小学校教諭（研修員）

<sup>3</sup>川崎市立大師中学校教諭（研修員）

<sup>4</sup>川崎市立富士見中学校教諭（研修員）

## 主題設定の理由

### 1 川崎市の実態から

川崎市内の小・中学校には、現在約 1,900 人の帰国児童生徒と、約 800 人の外国人児童生徒が在籍している。これは、市内小・中学校全児童生徒数の約 3 %に相当し、1 学級に 1 人は、帰国・外国人児童生徒が在籍する割合となる。また、川崎市総合教育センターの海外帰国・外国人児童生徒教育相談室には、毎日のように編入学相談の電話が寄せられ、実際の相談件数も多い。今後、ますます帰国・外国人児童生徒が増加することが予想できる。こうした現状を踏まえ、子どもたちは学校教育の中で多様な文化をもつ人々と共に学んでいくことが、ごく自然な状況になりつつある。

帰国・外国人児童生徒と共に国際理解を広め、深めることの重要性は従前から言われてきている。川崎市では、帰国・外国人児童生徒への適応指導についての研究は以前から取り組まれてきている。しかし、言語や文化、生活体験等が異なる帰国・外国人児童生徒と共に育っていくための授業の在り方についての研究はまだ十分とは言えない。

### 2 川崎市外国人教育基本方針から

川崎市では、全国に先駆けて 1986 年に「川崎市外国人教育基本方針 主として在日韓国・朝鮮人教育」を制定した。平和を願い、あらゆる国の人たちと手を携えて「ともに生きる」ことが、これからの教育の中で心がけなければならない最も重要な課題の一つと考えられたからである。1996 年には、在日韓国・朝鮮人のみならず、すべての外国人を視野に入れた「川崎市外国人教育基本方針 多文化共生の社会をめざして」と改定し、川崎市は教育行政の基本的理念として多文化共生という視点を強く打ち出した。その中で「在日外国人教育は、多文化共生の社会をめざす教育の営みでもあり、日本人と外国人の双方の豊かさを育み、違いが豊かさとして響き合う人間関係や社会をつくりだしていくことをめざさなければならない」と述べられている。

### 3 中央教育審議会答申から

一方、平成 15 年 3 月の中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方」の中では、今後の教育の課題として「グローバル化の中で、自らが国際社会の一員であることを自覚し、自分とは異なる文化や歴史に立脚する人々と共生していくことが重要な課題となっている。」と述べられている。21 世紀を生きる子どもたちは、今以上に異なる文化や歴史をもつ多くの人々と共生していくことが必要と考えられる。そして、異なる文化をもつ人々と生活していく中で、自らのアイデンティティをしっかりと確立することが必要になってくるだろう。

このような理由から、学校教育の中で、教師が国際理解教育を積極的に行い、児童生徒が自分と異なった文化を理解し共生していくことは必須であり、また、これらはグローバル化の中で行われなくてはならない重要な課題であると考えられる。

そこで、研究主題を次のように設定した。

**多文化共生の社会を目指した国際理解教育  
帰国・外国人児童生徒と共に育つ国際理解教育の在り方**

## 研究の内容

### 1 「共に育つ」のとらえ

はじめに「共に育つ」ことについて述べたい。本研究会議では以前「帰国・外国人児童生徒を生か

す」という表現を使っていた。しかし「生かす」ということは、彼らを「活用する」「取り出す」という意味にもなりかねず、そこには相互啓発のねらいがないことに気が付いた。そこで、本研究会議では「共に育つ」と表現を変え、次のように定義付けをした。

「共に育つ」とは、帰国児童生徒、外国人児童生徒、日本人児童生徒がそれぞれ次の4つの資質や能力  
自分自身を知る（自文化理解）  
相手を認める（多文化理解）  
互いにかかわる（コミュニケーション能力）  
自分自身に誇りをもつ（自尊感情の育成）  
を学習の中で身に付け、「互いの豊かさを育み、違いが豊かさとして響き合い、3者が互いに尊重しあいながら成長していくこと」ととらえる。

なお、4つの資質や能力を設定するに当たり、次ページの「川崎市国際理解教育目標構造図（川崎市総合教育センター 平成13年度国際理解教育研究会議作成）」を活用した。ここでの豊かさとは、「違い（文化・人・考え）に出合ったとき、それを排除するのではなくそのよさを知り、それに自ら積極的にかかわることで、そのよさを吸収し、自分自身のもつよさと、相手のよさが一緒になり、さらに新しいよさが生まれる状態」と考える。具体的には帰国・外国人児童生徒が学級に編入学してきた時、外国での生活による様々な違いをもつ彼らと学級の子どもが、互いの違いをよさとしてそれを認め受け入れていくことで、心身共に自分を成長させていくことと考える。「3者が互いに尊重しあいながら成長していく姿」については61ページの「研究の構想」に記載した。次に「共に育つ」授業を行っていく際の配慮すべき点、特性、身に付けさせたい能力について以下の3者の立場を考えてみた。

#### （1）帰国児童生徒のもつ特性

帰国児童生徒の多くは、日本を含めた複数の国での生活を体験している。日本と他の国との比較を通して、日本という国や日本の問題点等を改めて見直すことができる。また、互いの文化や習慣の違いを理解し、尊重する姿勢も身に付けている。そして、固定観念にこだわることなく柔軟な価値観ももっている。このような彼らの特性を取り上げていくことは、日本人児童生徒に違いのよさや外国の文化を理解させる絶好の機会になると考える。また、外国人児童生徒と同様に、外国での体験を自信にして自分自身に誇りをもつことが重要であると考えられる。

#### （2）外国人児童生徒と一緒に学習を行っていく上での配慮すべき点

例えば、中国人生徒が在籍する学級で中国理解の学習を行う場合、多くの教師が中国人である生徒を全体の場で発表させるという発想をするのではないだろうか。東京学芸大学の佐藤郡衛は「この生徒が、自分自身が中国人であることに誇りをもっているかが大切である」と述べ、次の2点を指摘している。

中国人生徒が自国に誇りをもっていない場合は、上記のような授業の形態をとることで、その生徒をかえって中国人という枠におさめてしまう恐れがある。中国人生徒も、日本人生徒と一緒に中国のことを学びながら、自国について再認識させる方法が適切と思われる。

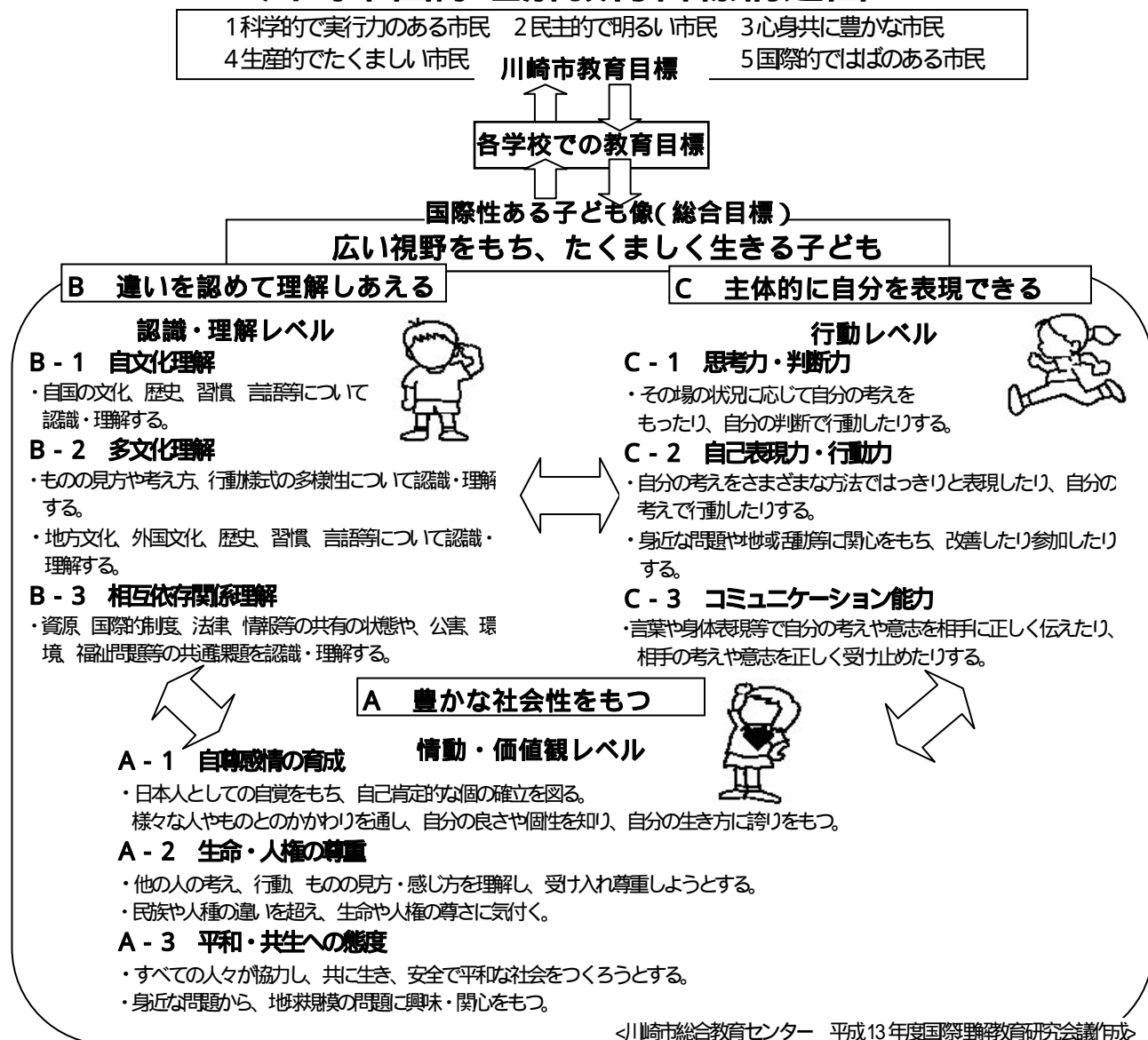
外国人児童生徒は、単なる学習の資料提供者等の存在ではなく、学習者として学習に参加することが大切である。すなわち、外国人児童生徒も授業の中で常に学習の主体者でなければならない。

このような理由から、中国人生徒が自国のことを他の生徒と共に学んでいくこと、そして彼らが主体的に学習することが彼らが生きる方法になるのではないだろうか。外国人児童生徒が自国に対する誇りを大切に、学びの保障を得て学習者として同じ立場で学ぶことが重要であると考えられる。

### (3) 「共に育つ」学習を通して日本人児童生徒に身に付けさせたい能力

帰国・外国人児童生徒と「共に育つ」学習を通して、日本人児童生徒は異質なものを排除することなく、異なる文化を理解し、幅のある人間に育つための能力を身に付けていかななくてはならない。日本人児童生徒が帰国・外国人児童生徒と共に学習することの楽しさを味わい、異なる文化との比較を通して自分を見つめ日本人の誇りや豊かな人間性を築き、そして異なる文化・習慣をもった人々を尊敬して学ぶことが重要であると考えます。

#### 川崎市国際理解教育目標構造図

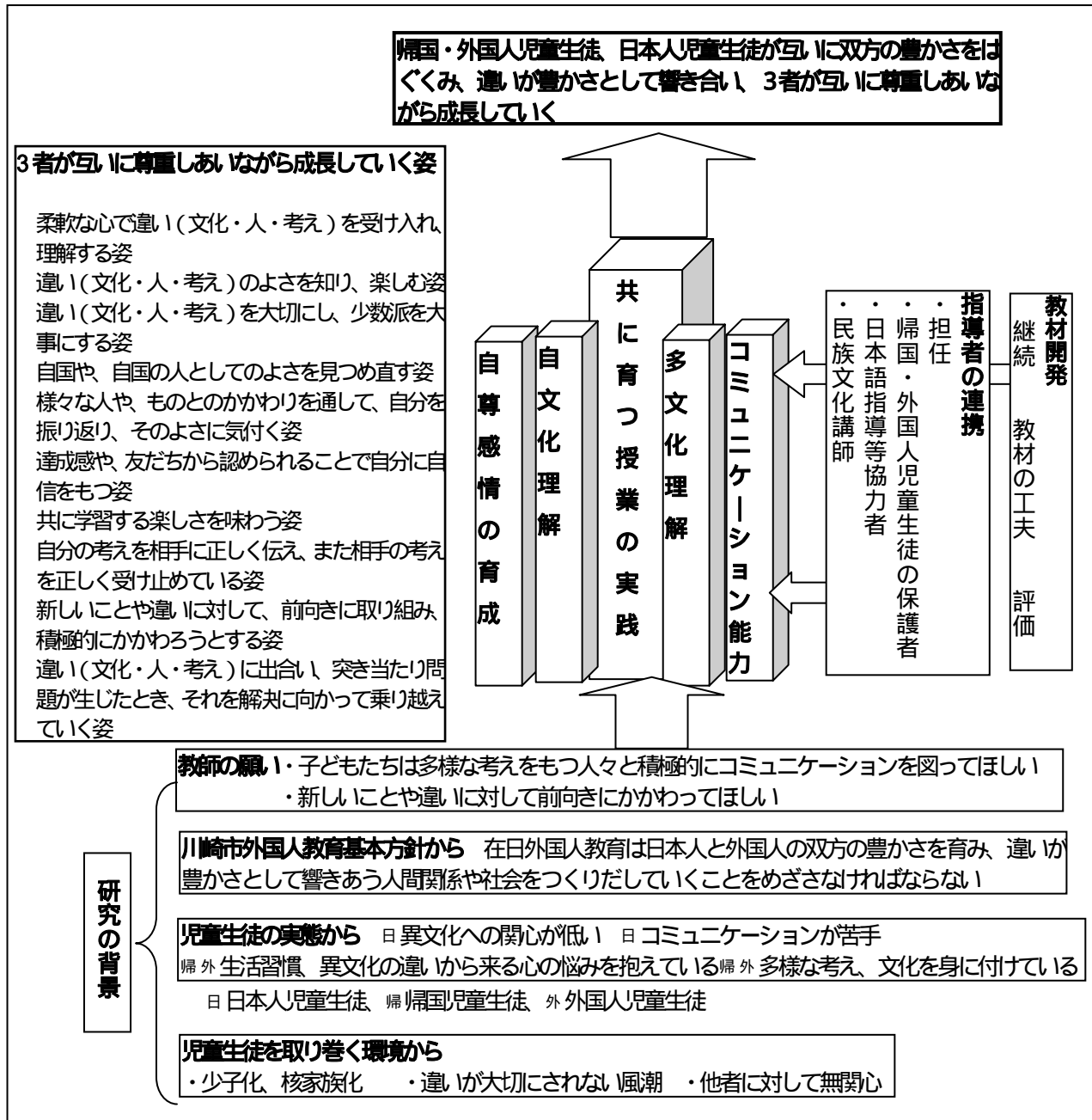


少子化や核家族化の中で、他者とのコミュニケーションが苦手で、自分の思いを正しく相手に伝えられない子どもが増えてきている。また、他者とのかわりの中で、自分に自信がもてないために自分や自分の国に対する誇りをもてない子どもも見受けられる。人と違うことをマイナスの意味でとらえ、違いをよさと受けとめることが難しい風潮があるように思われる。こうした子どもたちの実態や子どもたちを取り巻く環境から、そして今回の研究のねらいと照らし合わせて、「共に育つ」ために次の資質や能力、すなわち A - 1 自尊感情の育成 B - 1 自文化理解 B - 2 多文化理解 C - 3 コミュニケーション能力をさらに高めていきたいと考えた。なお、これらの4つの資質や能力は、授業を進めていく上での指標として取り組んでいくこととした。

## 2 研究の仮説

4つの資質や能力（自文化理解・多文化理解・コミュニケーション能力・自尊感情の育成）を育てる授業を工夫し継続的に実践すれば、帰国・外国人児童生徒、日本人児童生徒が互いに双方の豊かさをはぐくみ、違いが豊かさとして響き合い、3者が互いに尊重しあいながら成長していくだろう。

## 3 研究の構想



## 4 研究の方法

### (1) 川崎市の帰国・外国人児童生徒と日本人児童生徒の実態を把握する

#### 帰国・外国人児童生徒の実態

帰国・外国人児童生徒の来日前の海外での生活の状況が個人によって大きく異なるため、一人一人の生活経験、学習経験能力（既習内容）には大きな差がある。

帰国・外国人児童生徒の中で日本語指導を必要とする児童生徒は、日本語学習のほかに、文化の違いや新しい生活環境等による多くの悩みを抱えている。

日本語による日常会話ができるようになっても、日常会話と学習言語には大きな差があり、すぐに学級での授業についていけるとは限らない。

日本語教室と在籍学級での帰国・外国人児童生徒の様子に差があり、在籍学級では自分を表現しにくい雰囲気がある。

### 日本語教室及び日本語指導等協力者による日本語指導等の現状

川崎市内では、小・中学校に7校の日本語教室が設置されているが、それ以外のほとんどの学校では、担任と日本語指導等協力者との連携による指導が行われている。

日本語教室は、日本語の習得のほかに、帰国・外国人児童生徒がありのままの自分を表現できる場としても大きな役割を担っている。

### 日本人児童生徒の実態

日本語教室担当者会、日本語指導等協力者連絡会、本研究会議等で、川崎市内の日本人児童生徒の国際性について次のことが課題としてあげられた。

少子化や核家族化の影響で、他者とのコミュニケーションが苦手で自分の思いを正しく相手に伝えられない、また自己中心的で他者へ関心を向けることができない子どもが増えている。

新しいことや人と違うことに対して前向きに取り組んだり、かかわったりする経験が少ない。

他者とのかかわりの中で自分に自信がもてないため、自分に対して誇りをもてない子どもが多く見受けられる。

帰国児童生徒や外国人児童生徒に対して、支援する立場では協力的な児童生徒もいるが、同じ仲間として友達づきあいが続くケースは意外と少ない。

## (2) 指標と課題を設定する

前述した「川崎市国際理解教育目標構造図」を、子どもたちの実態と照らし合わせ、その中から次の内容を選び、今年度の授業の指標と課題とした。

	4月	5月	6月	7・8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
指 標	自文化理解										
	多文化理解										
	コミュニケーション能力										
	自尊感情の育成										

課  
題 相手を受け入れる 自分を知る 相手を知る

共に学ぶ 分かり合う かかわり合う

## (3) 検証授業を実施する

授業実践を通して「帰国・外国人児童生徒と日本人児童生徒が互いに尊重しあいながら成長していく姿」について検証する。

## (4) 検証授業を分析、考察する

検証授業を「授業の話し合い活動での発言」「ワークシートへの記述」「自己評価(振り返りカード)」「教師自身の見取り」を記録、集積し、そこから「帰国・外国人児童生徒と日本人児童生徒が互いに尊重しあいながら成長していく姿」を検証し、分析、考察する。

## 5 研究の計画

月	<b>スタート</b> ：学級にいる帰国・外国人児童生徒の実態把握			<b>指標</b> (目標構造図より) A1 自尊感の育成 B1 自文化理解 B2 多文化理解 C3 コミュニケーション能力	<b>振り返りカードの積み重ね</b>  <b>個の変容</b> ・違いを認めて、理解し合える (自文化理解 多文化理解)  ↓ ・自分の考え、意思を相手に正しく伝える 相手の考えを受け止める (コミュニケーション能力)
4	<b>問題点</b> ・他者とのコミュニケーションが苦手な子どもが多い。 ・帰国・外国人児童生徒は、生活習慣、異文化の違いからくる心の悩みを抱えている子どもが多い。 ・学級の中で帰国・外国人児童生徒が活躍できる授業の開発が十分とは言えない。				
5	<b>課題</b> ：相手を受け入れる 自分を知る 相手を知る <b>A 中学校</b> <b>B 中学校</b> <b>C 小学校</b>				
6	<b>行事・体育</b> 「協力して優勝を目指そう - 体育祭の取組 -」 B1 B2 C3  <b>学級活動</b> 「体育祭を振り返って」 B2 C3	<b>学級活動</b> 「心から分かりあえる仲間づくり」 C3  <b>学級活動</b> 「人を傷つける行為」 B1 C3	<b>行事・体育</b> 「運動会に向けて」 B1 C3  <b>国語</b> 「知っている場所教えてください」 B1 B2 C3		
7	<b>検証授業</b> 社会科地理「日本と中国のつながりについて考えよう」 B2 C3				
8	<b>学級活動</b> 「人を傷つける行為」 B1 C3				
9	<b>学級活動</b> 「いいところみつけた」 B1 B2 C3				
10	<b>課題</b> ：共に学ぶ 分かり合う かかわり合う <b>検証授業</b> 道徳「誰もが過ごしやすい社会」 B2 C3 <b>検証授業</b> 総合的な学習の時間「バレーダンス選手権」 A1 C3				
11	<b>行事</b> 「東京遠足に向けて」 B2 C3 A1	<b>音楽</b> 「混声合唱を豊かな響きで歌おう」 A1 C2 C3	<b>総合的な学習の時間</b> 「地域のすごい人をさがそう」 A1 B1 C3		
12	<b>ゴール</b> 研究のまとめ 仮説の検証 児童生徒（個と学級全体）の適応のプロセス 年間を通じた授業の在り方（展開）				
1					
2					
3	(参考) A1：日本人としての自覚をもち、自己肯定的な個の確立を図る。様々な人やものとのかかわりを通して、自分のよさや個性を知り、自分の生き方に誇りをもつ。 B1：自国の文化、歴史、習慣、言語等について認識・理解する。 B2：ものの見方や考え方、行動様式の多様性について認識・理解する。 地方文化、外国文化、歴史、習慣、言語等について認識・理解する。 C3：言葉や身体表現等で自分の考えや意思を相手に伝えたり、相手の考えや意思を正しく受け止めたりする。				

## 6 授業の実践

### (1) A中学校の事例(2年生) 外国人生徒が在籍する学級での取組

#### 学区の特色と学校の実態

学区は川崎駅周辺で、近年外国人(特にアジアから)が急増し、今後も親戚等を頼って増えることが予想される。学校には中国人生徒のほかにフィリピン人や在日韓国・朝鮮人の生徒も在籍している。日本語指導が必要な生徒が数名在籍しており、日本語指導等協力者から日本語指導の支援を受けている。

#### 抽出児童のプロフィールと抽出理由

- Aさん(女)中国人生徒**(小学校3年生のとき中国から来日した)自分の主張は熱心に語るが、周囲の状況や意見を理解していないことがありトラブルにつながることもある。他の意見に耳を傾け、それをもとにさらに自分の考えを発展させ、自他の違いを素直に受け入れさせたい。
- Bさん(女)ダブルの生徒** 父が日本人で母がフィリピン人のダブルの生徒。(日本生まれの日本育ちである)責任感が強く行事ではリーダーシップを発揮している。優しい性格で中国から来日したDさんの面倒をよく見ていた。「無理だ」と判断して早々にあきらめてしまうところがあるので、クラスの雰囲気改善のために粘り強く努力する力を身に付けさせ、周囲への積極的な働きかけもできるようにしたい。
- Cさん(男)日本人生徒**「周囲が自分をどう見るか」について神経質なところがあり、小学校の頃から学校で昼食をとることがほとんどない。自分の不得意な分野を極端に拒否するところがあるため、自分の長所に目を向け自尊感情を高めていきたい。
- \*Dさん(女)中国人生徒**(4月に中国から来日した)日本語がまったく話せず、週2日、日本語指導等協力者による日本語指導を受けているが、現状に不安を感じ、学校を休んで日本語スクールに通い始めた。体育祭練習期間は、午後から登校して練習に参加した。( \*Dは抽出ではないが、文中に出てくるため参考に掲載した。なお、6月より家庭の事情で学校を欠席している。)

	国際連携教育の視点	学習内容	指標	Aさん	Bさん	Cさん	学級全体	
5月	行事・体育・体育祭の取組	来日したばかりで、日本語が話せない中国人生徒と共に活動する場を設定した。体育祭の練習という「体験する場」を取り入れた。体験を通して積極的に他者にかかわろうとする姿を育てたい。	体育祭でのマスゲーム、生徒会種目、学年種目、ブロック応援などの練習を通して、中国人生徒を含め、他者と積極的にかわり、様々な面を発見し、協力する姿勢を身に付ける。	自文化理解(自分自身の行動を振り返る) 多文化理解(多様な考えをもつ相手を受け入れる) コミュニケーション能力(自分の考えを正しく相手に伝える)	4月から転入した、中国人生徒Dさんとの会話を通訳した。自分には他に友人もいるため、積極的に声をかけるということはなかったが、周りが会話に困っている前に来た。一生懸命、中国語を思い出している様子が見られた。	Dさんと同じ班のため、面倒を見ることが多かった。Dさんが午後から登校したときも、昇降口まで迎えに行ったり移動のときに、声をかけたりした。特に、ダンスの練習では、Dさんにマンツーマンで教えていた。	Dさんとは接点なし。自分からかわっていくことが多かった。練習では周りに協力的だが、ふざけている人に対して注意をする姿、積極的に他者にかかわろうとする姿はなかなか見られない。	女子を中心として力を合わせて体育祭を成功させようという雰囲気生まれた。ダンスやブロック応援の振り付けを覚えられない人に教え合う姿もしばしば見られた。男子は気分には分らがあり、普通の練習では非協力的な面もあった。
6月	学級活動・体育祭を振り返って	日本語スクールに通うことで、Dさんは体育祭の練習にほとんど参加できなかった。本番ではDさんの練習不足もあり、学級対抗のムカデ競争は敗れてしまった。話し合いでは、他者とのかわりの中で、自分の行動を振り返らせたい。	「練習に参加しなかったDさんがムカデ競争に参加したことは、よかったのか」という学級で起きた問題について話し合う。話し合いを通して、他者の考え方を知り、さらに自分の考えを深める。	自文化理解(自分自身の言動を振り返り次につなげる) 多文化理解(多様なものの見方、考え方を知り、認めそれを受け入れる) コミュニケーション能力(相手の考えを正しく受け止める)	「言葉の問題が大きい」というとらえ方をしていた。自分自身の体験にも重ね合わせている。級友に「Dさんに対してはやさしく接してほしい」と思っているが、自分にもそれを望んでいるわけではない。Dさんとのかわりを通して自分の行動を振り返ることができた。	「練習する回数が少なかったので出ない方がよかった」と冷静な判断をしている。他の人の意見を聞いて「助けてあげたり、教えてあげたりした方がよい」という思いを強くする。久しぶりにDさんが登校した時に声をかける等、Dさんを受け入れ、理解しようとしていることが分かる。	「クラスメイトだから参加するのは当たり前」という考え方だったが他の人の意見を聞いて、「やはりDさんの影響も少しはあった」と改めている。非難するのではなく別の参加方法はなかったかと考えている。Dさんを学級の一人として受け入れようという気持ちが読み取れる。	体育祭の取組を振り返り、2学期の合唱コンクールに向けて「もっと協力、支援しなければ」という声が多くあがった。一つのことを学級全体で振り返ってきたことで、今後の行事に向けて学級の友達と前向きに取り組み、積極的にかわっていくという意欲が読み取れる。



	国際理解教育の視点	学習内容	指標	Aさん	Bさん	Cさん	学級全体
7月	社会科の学習を通して、日本と中国のつながりを考えさせたい。この学習が学級に在籍する中国人生徒への関心に結び付くことを期待したい。	日本と中国はお互い重要なパートナーであることに気付く。今後日中はどのような関係をつくっていくべきなのかを考えるきっかけにする。意見を言いやすくする手立てとして、2つのテーマをあげて小グループでのディスカッション形式をとる。	自文化理解(日本と中国のかかわりの深さを理解する)多文化理解(中国の農業、工業等を理解する)コミュニケーション能力(自分の考えを正しく相手に伝える)相互依存関係理解(日中の人とモノの今後の関係性を考える)	中国についてのほとんどの授業を欠席。体調不良と家庭事情のため、欠席が増える。	日本と中国の関係だけでなく、自分自身は中国人とどのように付き合えばよいのか、まで考えを深めている。違いを受け入れ、理解しようとしていることが分かる。	一単元の中で、産業面(農業・工業)よりも文化や社会面の学習に意欲的に取り組んだ。日本にきた中国人の事情を追究し、日本人が中国人とよい関係をつくっていくには、お互いどうあるべきかを考えていた。	小グループのディスカッション形式の学習では普段よりも多様な意見が出て、考え方の違いを大切にすることができた。一方、自分自身の問題としてとらえさせるために、問題意識の持たせ方等の工夫が必要ながかった。
11月、12月	行事「東京遠足」に向け、クラス雰囲気の一部の男子に左右され、その他の生徒は早々にあきらめてしまうことが多い。班での話し合い活動を通して、自分の考えを相手に伝え、仲間の意見を受け止められるようにしたい。	1月に行う「東京遠足」に向け、グループ内で話し合い、見学地や見学コース等を決める。小グループ内での活動を通して互いのよさに気付き、かかわり合うことを体験させたい。	多文化理解(多様な考えをもつ相手を受け入れる)コミュニケーション能力(自分の考えを正しく相手に伝える)自尊感情の育成(係活動での仕事の達成感や遠足そのものの成功を通して自分に自信をもつ)	家庭事情のため欠席が増える。見学地決定までの班活動6時間中、1回しか出席しなかった。そのため班の中に「本当に遠足に参加するのか」という不安が広がる。	話し合い活動では自分の希望する見学地を積極的に発表した。副班長として、班長と共に少数派の意見も大事にしながら班の意見をまとめた。タイムテーブル作成では、粘り強く取り組んだ。	班の話し合い活動で他と食い違ったときは、周りに気を使い強く押すことはなかった。タイムテーブル作成では、はじめ班長がいなかったとき一人で苦労していたが、班長が来て二人で完成にこぎ着け協力の大切さを感じていた。	係分担や見学地の検討で活発に意見を交換し、協力や奉仕の姿勢を見せ合うことで、「お互いのよいところを発見することができた」という感想をもつ班も多かった。違いを受け入れ友達のよさを知ることができた。
年間を通しての反省	Aさん	Bさん	Cさん	学級全体			
効果課題	5月、6月は学級の仲間と共に学校生活を送った。Dさんに対しても、随所で積極的に自分からかかわりをもっていた。 10月以降、家庭の事情により欠席が増える。登校したときは、元気で周囲に自分からよく声をかける。学級の仲間と共に東京遠足に行けることを担任は願っている。	Dさんに対して、声をかけるなど、自分から積極的にかかわっていた。周囲とよりよい関係を築くにはどうしたらよいのかを考えている。1学期は無理だと早々にあきらめてしまうところがあったが、東京遠足の副班長を務める中で、グループのために粘り強く取り組む姿が見られた。問題解決に向け乗り越えていく様子が見られた。	Dさんに対しては、自分から積極的にかかわろうという姿は見られなかったが、社会科の学習の中で、日本人として今後中国とどのような関係を作っていくべきかを考えていた。2学期当初、周囲とのトラブルから自信喪失し、物事に非常に消極的になったが、合唱コンクールや「東京遠足に向けて」の活動を通して回復してきた。	1学期は学級の一員であるDさんに対して、自分はどうにかかわっていくべきか、考えを深めることができた。グループ活動を通して、互いのよさを発見することができたグループが多く見られた。話し合い活動では相手の考えを受け入れ、それぞれが自分の意見を言えるようになってきている。柔軟な心で違いを受け入れ、理解しようとする姿が多く見られるようになりつつある。			

考察・5月「体育祭の取組」では、学校を欠席しがちであったDさんに声をかけながら、学級全体で比較的協力して練習に取り組むことができた。個人的にDさんに声をかけたり、通訳をしたりする生徒もいた。しかし、Dさんに対して無関心の生徒もいた。個人によって意識に大きな差があり、授業を継続していく必要があることが分かった。

- 6月「練習に参加していなかったDさんが、体育祭の本番でムカデ競争に参加したことはよかったのか」について話し合った。一人一人が自分の行動を振り返り、自分の考えをもつことができた。Aさんは決してDさんに同情はしていないが、自分自身の問題としてとらえ、次からの接し方を考えていることが分かる。学級全体では、Dさんに対して簡単に同情的な見方をするのではなく、どうしたら自分たちと同じように学級活動に加わっていけるのか、冷静に判断する意見が以前に比べ増えてきている。中国人生徒を受け入れ、理解しようという気持ちが育ってきていると見ることが出来る。
- 7月「日本と中国のつながりについて考えよう」では小グループの活動により、普段よりも多様な意見が出た。ディスカッションのテーマでは、「中国人生徒の思い」と「日中の産業の流通」の二つをあげたが、前者では、日本語指導等協力者の資料を授業で取り上げた。それは、中国人生徒の思いを理解するのに役立った。また後者では生徒たちにとって身近なテーマ「廉価な中国製衣料」を題材にもってきたことで、活発な意見交流ができた。一方、生徒が自分自身の問題としてとらえていくために、時間の保障、問題意識の持たせ方、場の設定等の工夫が必要と感じた。
- 11月～12月の「東京遠足に向けて」では、小グループでの活動ということで、活発な発言や他の意見を聞くゆとり、考えを深める姿勢も見られた。多くのグループが「グループ活動を通して互いのよいところを発見することができた」という感想をもつことができた。

## (2) B中学校の事例(2年生) 帰国・外国人生徒が在籍しない学級での取組

### 学区の特色と学校の実態

平成12・13年度と市の道徳教育研究推進校であり、道徳の授業を通して活発な話し合い種が学校全体に定着している。生徒は落ち着いた学校生活を送っている。外国人生徒の在籍が少なく、日本人生徒と外国人生徒との交流する場面もあまりない。

	国際理解教育の視点	学習内容	指標	学級全体の姿容	
5月	学級活動「心から分かる話し合い」	学年で上履きが隠される事件が続いた。そこでこの問題に対して学級で話し合う必要があると考えた。 <b>柔軟な心で、違いや多様な考えを受け入れ理解し、そして自分自身を振り返ることを身に付けさせたい</b> と考えた。	学年で起きた問題について「なぜ起きたのか」「どうしたらなくなるのか」を話し合い、これからの学級のよりよい方向について考える。そして、自分たちは本音で友だちと付き合っているのか、今後どうすべきなのかについて一人一人が考えを深める。	<b>自文化理解</b> (友達にありのままの姿で接しているかを見つめ直す) <b>多文化理解</b> (相手の立場に立って友達を理解しようとしていたかを考える) <b>コミュニケーション能力</b> (自分の考えを相手に正しく伝える) <b>行動力</b> (身近な問題に関心をもち、改善したり参加したりする。)	話し合いを通して、お互いに本音を言い合える関係が築けていないことに気付いた。また、こうした表面的な人間関係が、逆にトラブルの原因になっていることにも気付くことができた。そして今までの <b>他者とかかわりを振り返ることで、自分自身の言動を見つめ直す</b> ことができた。
6月	学級活動「人を傷つける行為」	学級に慣れてきた理由から生徒同士の考え方の違いが際立ち、感情的なぶつかり合いが起きることがしばしばある。 <b>本音での話し合いをして、問題の解決を図りたい。</b>	学校生活での <b>生徒たちの心ない言動が目立つ</b> ことが気になっている。実際にこうした行為に心を痛めている生徒も多い。時には、いじめへと発展してしまっている例もある。この問題について学級全体で話し合い、考えていく。	<b>自文化理解</b> (自分の言動が他人からどのように受け止められているのかを知る) <b>多文化理解</b> (相手を知る。多様な考えを受け入れる) <b>コミュニケーション能力</b> (相手の考えを正しく受け止める)	自分の日頃の言動が、他者にどんな影響を与えているのかを振り返り、考えることができた。また、 <b>多くの生徒が、相手の気持ちを考えて行動することの大切さについて、真剣に考えるよう</b> になってきている。
7月	学級活動「人を傷つける行為」	本音での話し合いがなかなかできないため、学級内での相互理解が深まらない。相互理解を深めていく一つの手立てとして、本音の部分を引き出すために、無記名アンケートを行った。これをもとにして、さらに話し合いを深めていきたい。	行ったアンケートの結果をもとにして、 <b>自分たちが何気なく行っている言動を見つめ直し、人によって自分とは違う様々な考え方がある</b> ことに気付く。	<b>自文化理解</b> (自分のとった行動を振り返り、次につなげる) <b>多文化理解</b> (自分と違った様々な考えがあることに気付き、それを受け入れる) <b>コミュニケーション能力</b> (自分の考えを正しく相手に伝える) <b>行動力</b> (身近な問題に関心をもち改善したり、参加したりする)	アンケートの結果を通して、 <b>人によって考え方や受け取り方が違う</b> ことに改めて気付くことができた。そして、 <b>他人の気持ちを考え、違いを認め合おうとする心</b> が多くの生徒に育ってきている。
10月	道徳 検証授業「誰かが過ごしやすい社会」	国際理解教育の視点	学習内容	指標	
	1学期は学級内で、人間関係によるトラブルが見られることがあった。これらより、 <b>相手の立場になって考え、違いを認めようとする姿勢</b> を身に付けていきたい。	市内の中国人中学生(現在高校生)の学校での体験を読み物教材として作成し、それを使って「誰もが過ごしやすい社会」について考える。話し合い活動を通して、 <b>一人一人が様々な意見を認め、尊重しそれを受け入れることができる</b> ようにしていきたい。	<b>平和・共生への態度</b> (違いを認め合い、共に生きようとする気持ちを育てる) <b>多文化理解</b> (他の国や民族の文化や考え方を受け入れ、尊重しようとするきかけとする) <b>コミュニケーション能力</b> (自分と違った意見や考え方に対して真剣に考え、自分の気持ちを素直に伝えようと努力する)		

考察・5月は、話し合い活動を通して本音で語ることでできない表面的な人間関係が、相手に誤解を招いていることに気付くことができた。それは逆に、自分を振り返るきっかけになった。

・6月の実践では、相互理解を深めていく一つの手立てとして、本音で言えない部分について無記名アンケートを行った。その結果を振り返ることで、多様な考えがあることや、それを受け止めていくことの大切さに気付いた生徒が少しずつ増えてきた。

・これらの実践から、他者とかかわることで相手を深く知るための、また学級全体で自分自身の考えを相手に伝えるための、指導の手立てや工夫を授業の中で行っていきたいと考えた。そこで10月に検証授業を実施した。

### 道徳 検証授業で使用した読み物資料「ここは日本なんだから」(自作)のあらすじ

中国人生徒チェン・スさんが中国から転入してきた。彼女は中国語しか話せず不安でいっぱいだった。はじめは絵里さんや、多くの友達が声をかけ、仲良くしてくれた。しかし球技大会の種目決めの話し合いのときに学級の大半がドッジボールといった雰囲気の中で、素直に「自分はバスケットボールをやりたい」と言ったところ、「大勢の人の意見に従うのが当たり前でしょ。人と違う意見を主張したら嫌われるよ。ここは日本なんだからね」と言われ、これをきっかけに周りの友達がよそよそしくなってきた。数学のテストで100点をとったときはみんなから「調子にのってんじゃあねえよ」と言われた。いじめられていることを担任の先生に相談すると、「ここは日本なんだからしょうがないよ。そのうち慣れてくるから今は我慢しなさい。君は自分が中国人という意識が強すぎるから、もう少し日本人に合わせるようにしていった方がいいよ」と言われ、今すぐにでも中国に帰りたくなってしまった。

**発問1 学級会でクラス全体がドッジボールになりかけていたとき「えっ、やりたくない」と言ったチェンさんに対して**

日本のようにまわりに合わせるのが普通かもしれないけど、中国式に素直に自分の気持ちを伝えた方がいいし。

中国と日本では学校で教えることが違う。日本に来たんだからチェンさんは我慢すべき。

**自己主張すべき**

ぼくだったら、その後の流れを読んで行動する。

- ・逆や異なった立場から意見を述べている。コ
- ・友達の見聞き、それを受け入れ認めている。多
- ・中国の考え方を尊重している。多

**集団に合わせるべき**

**発問2 チェンさんが100点をとったことで、いじめや無視などみんなの態度が変わってきたことについて**

クラスの友達がチェンさんを無視するのはおかしい。

自分の経験から。テストで100点とれたと自信があったが、予想より悪い点数だったことがあった。この時100点をとったライバルに対してむかついた。くやしかった。\*1

**無視・いじめはおかしい**

チェンさんは努力して100点をとったのだから、それに対してまわりがむかついたり、からかったりするのはおかしい。

**いじめる側の気持ちもわかる**

その人たちも、むかつくとか言うよりはくやしかったから、そういう嫌味な言い方をしてしまったのでは？

**\*2 (クラス中から拍手がわきおこる)**

それよりも先生が「日本語を使っている君たちはひどい点数だ」と言ったことが頭こぶちんときた。\*2

- ・自分の経験を踏まえて、理由付けをして意見を述べている。( \*1 ) コ
- ・自分の伝えたいことを素直に伝えようと努力している。コ
- ・学級全体が最後の意見( \*2 ) に共感して盛り上がり、自然に全体から拍手がわきおこった。平多

**発問3 「ここは日本なんだからしょうがない」「慣れるまでがまんしなさい」「もっと日本人に合わせてよう」と言った先生の発言について**

チェンさんは辛くて先生のところに相談に行ったのに、その言い方はひどすぎ。

先生の発言は  
おかしい

もし逆の立場だったら、この先生も急に外国になじめないと思う。だから、中国人にすぐなじめて言うのは無理。

「日本人に合わせてよう」と言ったのが嫌だな。

「そのうち慣れてくるから、我慢しなさい」が「感情を捨てる」というふうに思える。

「日本人」「中国人」という言葉は関係ない、それよりも人間としての方が大事。

「日本人に合わせてよう」と言っている先生が一番日本人意識が強いかもしれない。

・この先生の発言が、「多様な考えを受け入れにくい日本的な考え方」ではないかと思われる。この先生の考え方に疑問をもつことが、共生や多文化理解につながっていく。ここでは、先生の発言に疑問をもった生徒が多く見られた。平

**発問4 今日の授業の感想を**

**仲良くするべき**

**仲良くはできない**

同じ人間なのでからかったりしないし。

中国人とか関係なく、仲良くした方がいい。

日本人と中国人の食の違いがあると思うけどそれを互いに補い合えばいい。

集団に流されず、考えを行なうべき

同じ人間てことはわかる。でもぼくは髪の色やししゃべり方も違う外国人には、やっぱりつかかりたくない。。

差別やいじめは、いけなくとど分かっているけど、集団に流されてしまうのでは。実際、自分はどう行動すべきなのか。

- ・多数派や常識的な考え方に左右されず、何が正しいのかについて考えた意見が出てきている。コ多
- ・一人一人の意見が大事にされている。多

多 多文化理解 平 平和・共生への態度 コ コミュニケーション能力

**図 検証授業1時間の流れ**

考察

- ・子どもたちは外国人生徒が学校生活の中で文化や習慣の違いで戸惑い、苦労している様子を知った。そして教材の中に出てくる中国の文化や考え方を受け入れ、尊重しようとする姿が見られた。
- ・様々な立場から意見が出て意見の対立が起きた。また話し合い活動を通して、少数派を尊重しようとする気持ちが生まれた。中には多数派に流されることなく、何が正しいのかについて真剣に考えることができた生徒もいた。
- ・自分と違った意見や考え方に対して真剣に考え、自分の気持ちを素直に伝えようと多くの生徒が自分なりに努力していた。

### (3) C小学校の事例(3年生) 帰国・外国人児童の両方が在籍する学級での取組

#### 学区の特色と学校の実態

文部科学省「帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域」のセンター校。国際学習室が設置されている。学区内にはいくつかの社宅があり、帰国児童が多い。そのため長年帰国児童の受入の研究に取り組み、帰国・外国人児童の受入体制が整っている。最近では、ダブルの児童の在籍も見られるようになってきている。海外生活体験者数は全体の1/6を占める。

#### 抽出児童のプロフィール

**Aさん(男)ダブルの児童** 父が日本人で母がフィリピン人のダブルの児童。元気でスポーツ万能である。ドッジボールが大好きで休み時間には多くの友達と遊んでいる。国語の本読みは、一字一字指で追いながら読んでいる。時々放課後担任と一緒に本読みを行うが、友達の目を気にしている。学習面での遅れを気にしている面があり、担任としてはもう少し自信をつけさせたいと考えている。

**Bさん(女)帰国児童** 0～2歳まで香港、2～4歳まで日本、4～8歳までアメリカで過ごしている。5月に日本に帰国。日本での生活に、はじめは珍しいことばかりで、楽しい気持ちの方が強かったが、1ヶ月ほどして担任の言っていることが理解できなかつたり、書くことができなかつたりしたことに悩んでいた。Bさんと相談し、1学期中は毎週水曜日の休み時間に個別相談を行った。

	国際連携教育の視点	学習内容	指標	Aさん	Bさん	学級全体
5月	体育・行事「運動会に向けて」 学級には帰国や外国人児童が在籍する。行事である運動会への取組の中で、彼らの個性が生きてくる場面を設定し活躍の場をひろげていきたい。	運動会を自分たちでつくり上げていく。グループでの話し合い活動を通して、自分たちで運動会をつくり上げていくという意識を持ち、主体的に行動する力を身に付ける。	<b>多文化理解</b> (グループ活動を通して友達のよさを知る) <b>コミュニケーション能力</b> (自分の考えを正しく相手に伝える) <b>行動力</b> (自分の考えで行動する)	応援では、好きな歌を通して友達とかかわり合いながら練習した。Aさんの得意なことを生かすことができた。学級の仲間と共に、学習する楽しみを味わうことができた。	初めて経験した日本の運動会では、大玉運びを担当した。友達に積極的にかかわり協力して活動した。新しいことに対して前向きに取り組んだ。運動会当日、声をからして友達と一緒に応援しているBさんの姿に母親は驚き、喜んでいった。	自分たちで運動会をつくり上げていく中で、話し合いを多くもち意識が高まった。グループ活動を通して、自分の考えで行動する場面が多く見られた。話し合いや練習など、友達の考えやがんばりを知るよい機会になった。
6月	国語「知っている場所」 自分の知っている場所、好きな場所を学級の友達に伝えることを通して、帰国・外国人児童が全体の場で自分を表現する機会を設定する。学級の友達が、彼らのよさや異なる文化を知る機会にしたい。	自分の知っている場所、好きな場所を学級の友達に伝える。相手意識・目的意識を明確にして、情報の発信・受信の力を育てる。情報交換をしていく中でコミュニケーション能力を身に付ける。	<b>自文化理解</b> (自分の住んでいる地域のよさを知る) <b>多文化理解</b> (友達との視点の違いや、地域のよさを知る) <b>コミュニケーション能力</b> (自分の考えを相手に正しく伝える)	作文を書くことが得意でなかったため、教師と個別で作文に取り組んだ。「学童保育クラブ」のことを伝えたいが文章で伝えることが難しかった。質疑応答形式にして、学級の友達から質問に答える方法でコミュニケーションを図った。	入学後のすぐの単元であったため、地域についてはほとんど知らない。アメリカの学校について紹介することになり、日本とアメリカの違いやそれぞれのよさを伝えていた。発表では給食、放課後等の違いに、みんなが驚いていた。しかしアメリカを思い出してホームシックになってしまった。	自分が知っている場所でも、お互いの視点が違い、また紹介した内容が違っていたことは驚きだった。互いの視点の違いに気付くことができた。地域の紹介では、日頃遊んでいる場所の再発見になった。伝えたいことを分かりやすく伝える難しさも実感していた。
7月	学級活動「いっこみつけた」 5月、6月の取組を通して、お互いを少しずつ知ることができてきた。今回はもっと深く相手のことを知り、また逆に友達から見た自分を知り、振り返るために、本単元を設定した。	友達のよさを見つけ、受容的な学級の雰囲気をつくる。友達が見つけた自分のよさを知り、受け入れられる喜びを味わう。自分ができるようになったこと、努力していることに気付き、自分のよさを見つめ直す。	<b>自文化理解</b> (自分自身のことを振り返り、そのよさを知る) <b>多文化理解</b> (相手のよさを知り、そのよさを認める) <b>コミュニケーション能力</b> (相手の考えを正しく受け止める)	学級の友達から学級で一番ドッジボールが強いことを認められた。友達から認められたことで、自分に自信をもつことができた。また、友達のよさをたくさん見つけることができた。違いを受け入れ、認める姿が見られた。	学級の友達から「英語が上手、やさしい」ということを認められた。友達から認められたことで自分に自信をもつことができた。しかし、本人は友達のよさをなかなか見つけることができなかった。	友達が自分のよいところを見つけてくれて、子どもたちはうれしそうだった。自分が気付かなかった面を友達が見つけてくれたことは、「自分発見」につながった。多くの友達とのかかわりを通して、自分を振り返り、そのよさに気付くことができた。

	国際理解教育の視点	学習内容	指標	Aさん	Bさん	学級全体
10月	縦割り学習の時間「地域のすごい人を探そう」権 ダブルの児童Aさんが学年が上がるにつれ、学習面で周りとの差が開いてきていること気に始めている。得意な分野で自信を付けさせていきたい。Aさんのもう一つの母国について本人や周りの友だちが知ることで、友達への理解を深め、「共に育つ」きっかけになればと思う。フィリピンのことを知ることによって自分のもつもう一つの母国にも誇りをもってほしいという願いから本単元を設定した。	フィリピンのゲストティーチャと交流して、バンブーダンスの体験をする。その後、グループで自分たちのオリジナルダンスを創作し、発表する。これらの学習を通して、フィリピンの文化（踊り）に親しむ。	多文化理解（フィリピンの方との交流を通して、自国の文化を大切にしている人の素晴らしいと感じる）コミュニケーション能力（自分の考えを正しく相手に伝える）自尊心の育成（友達と協力し、一つのものをつくりあげていく過程で達成感を感じる）	フィリピンの文化に触れることで、うれしそうな表情を見せていた。特に、「お母さんを学校に呼んでフィリピンのことをみんなに教えてあげたい」と言い出したことから、Aさんがフィリピンのよさを感じ、それを誇りに思っていることが分かる。	外国の文化理解の学習はBさんが自信をもって学習に取り組める場をつくることになった。発表では、アメリカにいたとき使っていた、バンブーダンスの衣装を家から持ってきて、女の子同士で衣装を着て、その場を盛り上げた。	「バンブーダンス選手権」という目標に向けて、グループで一つのものをつくり上げていく過程で問題が生じた時、それを解決に向けて乗り越えていく姿勢が多く見られた。また達成感から自信をもつことができ、フィリピンの文化をAさんと共有できた。仲間と、共に学習することの楽しさを味わった。
11月 12月	1学期の地域学習を元に、この単元では、より地域を身近に感じ取っていただくために、地域の人に焦点を当てた。地域に住む方を調べることで自分の町への愛着をもってほしい。地域の名人を探すが目的ではなく、「地域のすごい人を探そう」と投げかけることでその方の生き方や、考え方に目を向けさせたいと思い、本単元を設定した。	地域に住んでいる名人（一つのことを秀でている人）を探し、調べ学習を通してその人の生き方や考え方を学ぶ。調べたこと、学んだことを工夫して発表する。	コミュニケーション能力（地域の方に直接インタビューしたり、友達と協力して課題を解決したりする。）自文化理解（地域のすごい人を調べ、知ることによって地域に愛着をもつ）	自分の調べたい人が決まらず、見通しをもて活動ができなかったため、発表では自信をもって話すことができなかった。練習を重ね、友達から励まされていく中でだんだん声も大きくなり自信をもてるようになった。	取材では、積極的に質問をしていた。発表形式が劇に決まったときは、意欲的に自分から脚本を書いできた。発表では、発想の豊かさが随所に見られた。新しいことに前向きに取り組む、積極的にかかわっていた。	学習を通して、自分たちの住んでいる地域のよさを改めて知ることができた。ほかに友だちと一つのものをつくり上げていく中で協力の仕方もういぶん成長した。また、友達のよさを認めたり、アドバイスできるようになったりしたのは大きな成果である。
年間を通しての振り返り 効果 課題	Aさん		Bさん		学級全体	
	「いいとこみつけた」では、友達から認められることで、自分に自信をもつ姿が見られた。様々な活動を重ね、友達とのかかわりも深まってきた。また「バンブーダンス選手権」では、フィリピンの国のよさを見つめ直し、学級の友達と共に学習する楽しさを味わう姿が見られた。 自分の気持ちを言葉や文章で伝えることがなかなかできないため、イライラしてしまうことがあった。教師が個別にゆっくりと話を聞いたり、言い方を一緒に考えたりする中で、少しずつ安心していった。		物の見方が多様なので、新しいことを柔軟に受け入れることができ、また、豊かな発想をもっている。それをグループ活動の中で取り入れてきた。友達と共に学習する楽しさを味わう姿が見られた。多様な学習形態の中で、新しいことに対して、前向きに取り組む、友達に積極的にかかわろうとする姿が見てとれた。		友達と一つのものをつくり上げていく過程で問題が生じたとき、それを解決に向かって乗り越えていく姿が見られた。そして協力の仕方が成長した。Aさんのもう一つの母国を知る学習や、豊かな発想をもつBさんと共に学習してきたことで違いのよさを知り、それを楽しむ姿が見られた。感想を述べ合う場面では、お互いを認め、柔軟な心で違いを受け入れ、理解する姿が見られた。	

考察・5月「運動会に向けて」では、帰国・外国人児童がそれぞれ活躍の場を得て、主体的に活動することができた。学級全体も運動会という行事に向けて互いに話し合い、協力しながらそれぞれのよさを出し合いながら活動することができた。

・6月「知っている場所教えます」では、帰国・外国人児童がそれぞれ伝えたいことを自分なりに工夫して、学級の友だちに伝えることができた。Bさんはアメリカの様子を学級の友だちに伝える機会を得た。そして日本とアメリカの違いやそれぞれのよさを伝えた。学級全体では違いを受け入れ、そのよさを知ることができた。

・10月「バンブーダンス選手権」では、指導者の連携（担任・外国人児童の保護者・日本語指導等協力者・民族文化講師）で、外国人の子どもの居場所、つまりAさんが自信をもって学習に取り組める場をつくることができた。コンテスト形式、審査員制を採り入れた。バンブーダンスの専門家である民族文化講師が、自分たちの創作したダンスを認め、励ましてくれたことは、子どもたちの自信につながった。それはつくり上げた喜び、すなわち達成感となった。ダンスをつくり上げる過程で子ども同士の意見の対立が起きたが、それを解決に向けて乗り越えていく姿を見ることができた。

## 研究のまとめ

### 1 研究を通して見えてきたこと

研究を終えて、実践の成果とその手立ての有効性について考察した。

#### (1) 3者が互いに尊重しあいながら成長していく姿

子どもたちの変容は、「授業中の話し合い活動での発言」「ワークシートへの記述」「自己評価(振り返りカード)」「教師自身の見取り」等の記録をもとに、評価を繰り返し行うことによってとらえてきた。子どもたちの振り返りカードや授業中の発言には、次のようなものがあった。「話し合いをしてあらためて、人によって感じ方が違うんだなあと思った」「はじめはチームワークがばらばらだったけど、少し声を出してやってみたらうまくいった。はじめよりチームワークがまとまってきた。練習というより楽しい感じがした」「差別やいじめはいけないことはわかっている。けれども、集団に流されてしまうのでは。実際、自分はどう行動するべきなのか、考えなくてはならない」「中国人たちが日本に来て不安に感じることは、言葉が通じないこと、周囲の状況がわからないこと、文化の違いであることがわかった。また、行事での取組やグループディスカッションを通して、「自分は、外国人生徒や他者とどのようにかかわっていくべきか」について考えを深め、そして少しずつ違いを受け入れ、理解しようとする姿勢が学級全体で感じられた。さらに総合的な学習の時間での調べ学習では、グループで調べた内容をまとめ発表する過程で、意見の対立等の問題が生じた時、互いの意見を大切にしながら解決に向かって乗り越えていく様子を見ることもできた。これらは「3者が互いに尊重しあいながら成長していく姿」が育ってきているととらえたい。

#### (2) 手立ての有効性

##### 年間を通じた授業の在り方

年間を通して2つの課題(相手を受け入れる・共に学ぶ)と、4つの指標(自文化理解、多文化理解、コミュニケーション能力、自尊感情の育成)をそれぞれ設定して、「帰国・外国人児童生徒と日本人児童生徒が互いに尊重しあいながら成長していく姿」を目指して実践を行ってきた。また年間の単元計画を具体的に立てて、教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の中で実践を継続してきた。前述した4つの評価方法での記録、資料をもとに評価を繰り返し行い、子どもたちの変容を見てきた。そして子どもたちの実態を把握し、実態に合った教材の開発を行い実践してきた。

実践を一年間継続してきたことで、子どもたちの成長を追うことができ、またその成長の手助けをすることができた。帰国児童は外国文化理解の学習や、グループでの発表の場を通して、日本での学校生活に少しずつ慣れていき、自分を発揮できるようになってきた。外国人児童は、母国理解の学習を通して、安心して意欲的に学習できる場を得て、母国のよさに気付き、それを誇りに感じている様子が感じられた。日本人児童は外国文化理解の学習や、グループ学習、友達とかかわりあう場での学習を通して、多様な文化や考えを尊重する姿勢が身に付いてきた。学級全体としては、共に学習する楽しさを味わう姿、違いに出合い問題が生じた時、それを解決に向かって乗り越えていく姿等が見られた。年間を通して継続的に取り組み、評価し授業を改善したことで、子どもの実態に応じた指導が可能となり、子どもたちの変容につながったと考える。

##### 指導者の連携

授業実践に当たっては指導者の連携が重要と考え、担任、外国人児童の保護者、日本語指導等協力者、そして民族文化講師が協力し合って授業を行った。外国人児童と同じ国の人たちがゲストティーチャーとして授業に参加したことは、言葉の面だけでなく、精神的にもその児童が安心して学習でき



る場、すなわち居場所をつくることにつながった。そのため外国人児童は、自信をもって積極的に学習に取り組むことができた。また、外国人児童が母国のよさに気づき、それを誇りに感じている様子も伝わってきた。学級、学年全体で外国人児童の母国を学んでいく過程で、外国人児童が自ら「その国のことだったら、ぼくのお母さんに聞くといいよ」と言ったり、交流会の実行委員に立候補したりしたことから、この学習を通して自信をつけ、成長できた様子が分かる。

また、日本語指導等協力者の協力を得て、外国人生徒の思いを理解する資料を作成し、授業も行った。「中国人生徒たちが日本に来て、不安に感じることもうれしかったこと」というその資料は、日本人生徒にはなかなか知ることのできない、中国人生徒の本音が具体的に書かれてあり、中国人生徒の抱えている心の悩み等を理解するのに大変役に立った。この資料を読み終えて、子どもたちは以前に比べ、学級に在籍する中国人生徒により関心を向けるようになってきた。指導者が連携することで、異文化理解が深まり、外国人児童に自国に自信をつけさせることができた。そして、外国人児童生徒の理解に効果的だった。

### 教材の工夫

担任が実話をもとにして作成した、道徳の読み物資料を授業で活用した。子どもたちは、外国人生徒が学校生活の中で文化や習慣の違いで戸惑い、苦労している様子を知ることができた。そして、外国の文化や考え方を受け入れ、尊重しようとする姿が少しずつ育ってきた。ほかに「日本と中国のつながりについて考えよう」では、「中国人生徒の思い」と「日中の産業の流通」の2つを教材にしてディスカッションを行った。「日中の産業の流通」では、中学生に身近な「廉価な中国製衣料」を題材として取り上げた。身近な題材から、貿易の面で中国とのつながりについて学習することで、活発な意見交流ができ、より理解を深めることができた。また評価の手立てとして「バンブーダンス選手権」で、コンテスト形式、審査員制を採り入れた。これは、複数の指導者が子どもたちの創作したダンスを認め、良かった点を具体的にほめたことで、子どもたちの意欲、自尊感情を高めた意味で大変効果的であった。

### かかわり合う多様な場の設定

実践してきた授業は、設定した場の目的によって、次の3つに分けることができた。

場の目的	ねらい・手立て	単元名・題材名・活動名	子どもの変容と指標とのかかわり
<b>特性を取り上げる場</b>	帰国・外国人の特性を生かす。	「日本と中国のつながりについて考えよう」「バンブーダンス選手権」「知っている場所教えます」「地域のすごい人をさがそう」	帰国児童は、調べ学習や発表の場等で、新しい発想、想像力、積極性等を発揮し、その個性豊かな面が引き出された。まわりの子どもたちにもそのよさが認められ、本人の自信にもつながった。 <b>(多文化理解・自尊感情の育成)</b>
<b>共に活動するかかわり合う場</b>	競い合い、協力、達成感を感じながら、グループで一つのものをつくり上げていく。	「体育祭の取組」「東京遠足に向けて」「バンブーダンス選手権」「運動会に向けて」「地域のすごい人をさがそう」	グループで一つのものをつくり上げる活動の中で、互いの意見や考えを出し合うことができた。競い合うことや協力を経験し、最後には達成感を感じることができた。それは日本人生徒にとって大きな自信につながった。 <b>(コミュニケーション能力・自尊感情の育成)</b>
<b>みんなで考える場</b>	学級全体で、身近な問題について討論する。	「体育祭を振り返って」「心から分かり合える仲間づくり」「人を傷つける行為」「誰もが過ごしやすい社会」	少数派や多様な意見を大切に、自分の考えをもち全体の場で述べることもできた。また話し合いを通して、自分自身を振り返ることができた。 <b>(自己理解・多文化理解・コミュニケーション能力)</b>

これら3つの場の設定により、子どもたちは他者とかがわり合う機会を多くもつことができた。子どもたちはその中で多くの違いに出会い、それを受け入れ、認めていく姿勢が少しずつ育ってきた。例えば「みんなで考える場」では、学級で問題になっている身近なテーマについて、学級全体で討論するという形式で授業を行った。その中で、少数派や自分と異なる意見を大切にして、話し合いをすることができた。この学級では、実践を通して意見を言いやすい、相手を受け入れることのできる受容的な学級の雰囲気も育ってきている。

## 2 今後の課題

### (1) 帰国・外国人児童生徒の実態の把握とその方法

帰国・外国人児童生徒の実態把握は、教師による日常的な観察の他に、日本語指導等協力者、保護者、本人からの聞き取り等を行ってきたが、その難しさと重要性をあらためて感じた。学習経験や能力の違い、生活習慣や学校生活の違い、彼らが育ってきた背景等を担任、学級の友達が理解することが必要であることが分かった。しかしながら、児童生徒理解が十分だったとは言えず、適切な対応ができたか、疑問に思うときもあった。今後も帰国・外国人児童生徒の理解を多角的に進め、そして学習面や精神面での支援を行っていくことが重要であると考えます。

### (2) 日本文化や日本人としてのよさを見つめ直す学習の必要性

自文化理解の視点では、「自分自身を見つめ、自分のよさを知る」「自分の住んでいる地域のよさを知り、愛着をもつ」等の実践を行い、成果も少しずつ見えてきた。しかし、「自分が日本人であることを見つめ直し、そのよさを知る。日本人であることに誇りをもつ」、また「日本の文化を知り、見つめ直す中で、そのよさを実感する」という視点での実践が十分でなかった。日本は諸外国に比べまだまだ外国人の数が少なく、接触する機会も少ないため、自分が日本人であることを意識する機会が少ないように思われる。将来、異なる文化をもつ人々と共生していかなくてはならない子どもたちは、日本人としてのアイデンティティをしっかりと確立していく必要がある。こうしたことから、他国との比較、例えば外国のことを学んでいく中で「日本文化や日本人としてのよさを見つめ直す」学習、また「外国から見た日本文化や日本人としてのよさ、世界の中での日本の位置や在り方、立場等を知る」といった視点での学習等が、今後必要ではないかと思われる。

最後に、研究を進めるにあたり適切なお助言をいただきました先生方、研究にご支援、ご助言を下さいました学校教職員の皆様に、心より感謝し厚く御礼申し上げます。

#### 【参考文献】

- |   |             |
|---|-------------|
| 西宮市立小松小学校『帰国子女教育・国際理解教育研究紀要 第14集』                         | 1997年       |
| 文部省『小学校指導要領解説 総則編』東京書籍                                    | 1999年       |
| 文部省『中学校指導要領解説 総則編』東京書籍                                    | 1999年       |
| 文部省『よりよい出会いのために～帰国子女教育実践事例集～』                             | 1999年       |
| 太田 晴雄『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院                               | 2000年       |
| 佐藤 郡衛『国際理解教育 多文化共生社会の学校づくり』明石書店                           | 2001年       |
| 高橋 悦子『外国人児童生徒に対する「日本語指導等協力者」のあり方についての研究』<br>- 川崎市を事例にして - | 2001年       |
| 川崎市外国人教育検討委員会『ともに生きる』川崎市教育委員会                             | 2002年       |
| 川崎市教育委員会 日本語教室担当者会『川崎市・日本語教室実践記録集』                        | 2001年～2003年 |
| 川崎市総合教育センター『川崎市立小・中学校 海外帰国・外国籍児童生徒数調査報告』                  | 2003年       |

#### 【指導助言者】

- |                                     |       |
|-------------------------------------|-------|
| 東京学芸大学教授（川崎市総合教育センター専門員）            | 佐藤 郡衛 |
| 神戸市総合教育センター国際教育推進室指導主事（現神戸市立長田小学校長） | 東向 信明 |
| 川崎市立小学校国際教育研究会長（川崎市立菅小学校長）          | 岩淵 文昭 |
| 川崎市立中学校教育研究会国際教育部会長（川崎市立桜本中学校長）     | 甲斐 修  |
| 川崎市教育委員会総務部指導主事                     | 三ツ木純子 |
| 川崎市教育委員会学校教育部指導主事                   | 伊藤 民子 |
| 川崎市総合教育センター研修指導主事                   | 佐藤 裕之 |